



74 常磐津佐喜大夫

後に文正翁 細見公三市岩

天保三年正月河原崎直以小文字大夫のナカシ、天保四年六月市村庵にそのワキと詔了信小らと出勤す天保十一年より小らと出勤 文政六年九月市村庵興行に文正翁と改名す

75 常磐津男廿大夫

初め？

文政十一年十一月三日喜代大夫と改名(甲村庵直見番付)天保元年十一月市村庵に始り小文字大夫の三番目に出渡り 天保三年十一月男廿大夫と改め市村庵に小文字の三番目に出勤(紋番付)明和四年十一月市村庵の三番目に出勤後何イの名を一切の記録に見ず、尚、信は土佐・結城の如き小芝居で小文字大夫のワキと勤めたる三層に付出勤せし許を見ると三番目許うと終りしもの如し

76 常磐津岡大夫

天保八年三月市村庵に文字大夫のナカシ翌九年市村庵にワキと勤む(ナカシ若大夫) 四谷の若やの息子、生駒大夫の弟子、後年中風と行る

77 常磐津組大夫

(一寄政也) 後に江齋 細見公三本所

四代目若大夫の弟子 初名不明、三代目組大夫は薩摩生家の某と云い 兄弟子に當りしもの相續せしか故に人は其屋敷勤なりし如きもの、其四代目組大夫となす、天保八年九月中村庵に文字大夫のナカシと勤め 以来數度出勤、天保九年九月河原崎直にワキと詔了、その後七家元に従いワキ或いはナカシと勤む、弘化三年五月中村庵より江齋と

改名、安政四年七月、中村屋より三世相に、隨地獄の故よりテを譲り、
芝高輪詮誠寺に葬す。安政五年五月十七日、五十八才、法名顯道。

78
○常磐津吾妻太夫 (一書心三)

新橋江戸屋いひら子屋より、佐々木市屋の弟子。
天保九年八月、河原崎屋に始末を家元のナカシ、その後弘化三年六月、中村
屋の家元のワキを譲り、その後慶応三年まで出勤、慶応三年、吹死致
し、その子、明次元年の歳旦上より、正本には連名記入なし。
○八丁堀に住む林中末之人談、この人は大き、二方の芝居向きのよう、
器用な上りではなし、又、廿歳の弟が、佐々木八五郎になり、家元の總代と
なり。

79
○五代目常磐津兼太夫 (寛政元一丈又元) 初め小文太夫、後に松玉齋

初め小文太夫、天保六年八月、村田屋の小又字太夫の弟三番目出勤、同年
工月中村屋よりワキを譲り、天保八年十一月五日、兼太夫を譲り、(中村屋
親旦右番附) 翌十年一月、中村屋にワキを勤め、其の後、ワキ或いはナカシ
と一と出勤あり、嘉永四年中に松玉齋と改め芝居より引退、安政
二年迄の歳旦上より、にその名を記せし、三年間止は、是之を隠退
し、(その子) 一丈又元年八月十日、吹死、享年七十、三才、法名、本願寺中
膳林寺に葬す。一男、廿あり、男は富本の三味線弾きとなり、
兼藏徳治なり。兼太夫は家根松の家を生れ、お梅屋と嫌い、太夫
にうんと志し、禮物所(飯持)に、うと、禧古を、お梅太夫となり、と、
駒形河岸に住り。

80
□三代目常盤津綱太夫

天保十一年三月市村座 文字太夫のナカレ、その後、その名を芝居に見之可

81
□常盤津國太夫

細見八子番目豊彦行島

天保十一年十月市村座に文字太夫のナカレを勤む。その後、いづく出勤あり
安政四年七月市村座に「おその」三三三行「及」三三三社祭市札「おその」を勤め
同年九月同座に「おその」のワキ、その後、文字太夫、小文字、文中のワキ或いは
ナカレと度々末年まで出勤す。豊彦行島より豊彦元年に榎木庄
に移す。三代目佐々木市蔵の弟子なり

82
□五代目常盤津小文字太夫

○家元系圖より除外されてゐる。

豊後大塚の養子に、新安と云ふ。上州桐生に生ず。安政年中、四代目小文字
太夫離縁となり、五代目小文字太夫を名乗り、文久二年正月市村座に
豊後大塚のワキに出勤。美食父の歿後、夕下を勤め、文久三年まで出勤
あり、此、小字に不縁となり、美食家を逐ひ、向もなく生地桐生に歸り、
歿せり。これを桐生小文字と云ふ。

83
□初代常盤津松尾太夫

細見八子番目和泉所

天保十三年七月市村座に文字太夫のナカレを勤む。安政六年豊彦所育と
改む。明治になり、浪花所に住む
四谷天を横所直英寺に葬り、大刀川と云ふ中とあり

84

□常磐津直砂大夫

麻布白金に生る。ブリキ職をなす。組大夫の弟子となりたり。天保十三年六月
河原崎屋に四世文字守大夫の子かレを譲る。麻布白金八丁目に住む。
嘉永五年六月三日歿(文左衛門十三子あり)享年四十四。法名常直信士
白金正蓮寺に葬す。控の三枚目を終す。

85

□二代目常磐津三輪大夫

細見八ツ番目 小日向
弘化三年七月市村屋に文字守大夫の子かレを勤与し、以後引續き出勤
(享年和文九年唐い出勤せり三輪大夫と同人名り不明)

86

□初代常磐津

和佐大夫(文化十一年)明治三十三 細見八ツ番目 四谷大番所
後、岸澤和佐大夫、後、四代目若老大夫

四谷大番所の仕立屋に生る。慶次郎と云う。四谷大番所は佐々、新治の
文字守佐喜の半はまに常磐津を譲り、三代目和佐大夫の弟子と
なり、双方の名をとると和佐大夫と云う。もと湯家人なり
弘化四年三月市村屋に文字守大夫の子かレを、安政四年七月市村屋に
小文字守大夫の子かレを、後、四代目岸澤古武部令立す。や走るとそのつ中
或いは十かレを譲る。明治八年三月二十一日和佐大夫と云う(節義然)
明治三十三年一月二十三日歿。享年八十四。妙調院強道官通居士
市ヶ谷見附外桐雲寺へ葬す(歿年月日は五代目和佐大夫詞)
細い音なりしも美音なりし。是台に向つて、眼をつぶると、眼を
とるようであつしとのこ。